（ゴザ：新ひだか町教育委員会提供）

アイヌとは「人間」という意味

ひと

今も各地に残る アイヌ語の地名は 先住民族の証(あかし)です

アイヌとは「人間」という誇りある言葉

アイヌという言葉は、アイヌ語で「人間」という意味です。また、民族の呼称でもあり、「男らしい男」とか「夫」などという、アイヌの男性の尊称でもあります。

ところが、差別意識を持った人たちが侮辱(ぶじょく)の意味を込めてこの言葉を使ったため、アイヌ語で同胞という意味の「ウタリ」という言葉が使われるようになりました。

しかし、アイヌの人たちは、再びアイヌという言葉に誇りを持つようになっています。

かつての暮らしをしのばせるアイヌ語の地名

北海道をはじめ、サハリン(樺太(からふと))、千島列島や東北地方の北部には、アイヌ語に由来する地名が数多く存在します。このことは、これらの地域に、アイヌ語を話す人たちが生活してきたことの何よりの証(あかし)です。

また、これらのアイヌ語地名は、その地名を名付け、使ってきた人たちの考え方や生活文化などを知る手がかりにもなっています。

アイヌ語地名は、次の世代に残したい宝物として、平成13年度に「北海道遺産」に選ばれています。

かつてアイヌ語を話していた人々の分布図
(「アイヌ文化の基礎知識((一財)アイヌ民族博物館発行)」から)

アイヌの人たちは いつから住んでいたか

北海道に人類が住み始めたのは２万数千年前とされています。それからの長い年月のあいだに、さまざまな人の移動や移住、文化の移り変わりなどがありました。たとえば、縄文時代の北海道に暮らしていた人たちが、そのまま現在のアイヌの人たちにつながるわけではないことが指摘されています。けれども、両者のあいだには共通する遺伝的な要素があることも確認されていますので、アイヌの人たちの歴史は、縄文時代やさらにその前にさかのぼることができます。

より詳しいことについては、現在、人類学、考古学、歴史学、民族学などの各分野から総合的な視野で研究が進められています。

平沢屏山「アイヌ風俗十二ケ月屏風」から
（市立函館博物館所蔵）

古事記や日本書紀の中に アイヌの人たちが登場

『古事記』や『日本書紀』の中には、中央政府に服さない人々を指して「まつろわぬひとども」とか「蝦夷」という言葉が出てきます。特に『日本書紀』には斉明天皇の時代（658年）に「阿倍比羅夫が、船軍180艘を率いて蝦夷を討ち、有間の浜（津軽か）で渡島の蝦夷等を集めてもてなした」という記述があります。

この渡島が現在の北海道なのか、「蝦夷等」がアイヌを指すのかどうかははっきりしませんが、アイヌ語で解釈できる「蝦夷」の人名や東北地方の地名が記されているなど、言語学的にはアイヌとのつながりを見ることができます。

15～16世紀になると、多くの和人が蝦夷地に来るようになり、アイヌの人たちについてたくさんの記録を残しました。外国人の記録では、1565年にイエズス会の宣教師ルイス・フロイスがインドのゴアの本部に報告書を送り、初めてヨーロッパにアイヌ及び蝦夷地のことを紹介しています。

言 はなす

アイヌの人たちは固有の言葉を持ち多くの口承文学を伝えています

固有の言語を守り民族の文化を伝える

アイヌ語は、アイヌの人たちの固有の言葉です。しかし、明治以降、社会生活を営む中で日本語の使用を余儀なくされました。現在では、伝統的な儀式や祭事などの場を除いて、日常生活の中でアイヌ語を使うことはほとんどありません。

また、アイヌ語で自由に会話のできる人もごくわずかしかいなくなっています。

もし、民族の言葉が失われるようなことがあれば、それはその民族の文化と心を支える大きな柱を失うことになります。そのため、アイヌ語を守り、広げていく努力がアイヌの人たちの間で続けられています。

アイヌ語とは

アイヌ語は日本語と似た語順を持っていますが単語が大きく異なります。

また、日本語と異なる大きな特徴として動詞にク「わたしが」とかエ「あなたが」などを表す人称を付けるきまりがあります。

A：ネイ　ワ　エエク？
どこ　から　あなたが・来る
どこから来たの？

B：サッポロ　ワ　クエク.
札幌　から　私が・来る
札幌から来たんだよ。

A：タヌクラン　ネイ　タ　エレウシ？
今晩　どこ　に　あなたが・泊まる
今晩どこに泊まるの？

B：ヌプルペッ　タ　クレウシ　クスネ.
登別　に　私が・泊まる　つもりだ
登別に泊まるつもりだよ。

A：ニサッタ　ネウン　エオマン？
明日　どこへ　あなたが・行く
明日どこへ行くの？

B：オビヒロ　ウン　クオマン.
帯広　へ　私が・行く
帯広へ行くんだ。

参考文献
「アコロイタク」アイヌ語テキスト１（北海道ウタリ協会）
「アイヌ文化の基礎知識」（アイヌ民族博物館）
「アイヌ語方言辞典」（岩波書店）

「アイヌ語入門講座（白老町）」　　（（公財）アイヌ民族文化財団提供）

アイヌの人たちが語り継ぐ物語

アイヌの人たちの間には、超人的な主人公が活躍する「ユカㇲ」という物語をはじめ、神々の物語、昔話や由来話など、アイヌの人たちの豊かな心から生まれたたくさんの物語が伝えられています。

そして、昔話などの中には、生きていくために必要な知恵や戒めなども語られています。

（（公財）アイヌ民族文化財団提供）

民族の心と誇りを学ぶアイヌ語教室

アイヌ語を守り、広げていくため、各地でアイヌ語教室が開かれ、テキストも作成されています。

アイヌの子どもたちをはじめ多くの人たちが、その言葉とともに、自然の中に生きてきたアイヌの人たちの心も学んでいます。

（公財）アイヌ民族文化財団が実施するアイヌ語教育事業（令和5年度）

○アイヌ語上級講座の実施地区
　東京、阿寒、帯広、白老、平取、三石
○アイヌ語初級講座（親と子のアイヌ語学習）の実施地区
　東京、札幌
○アイヌ語初級講座（アイヌ語入門講座）の実施地区
　東京、旭川、釧路、札幌、白老、平取、むかわ

衣（きる）

魔よけなどの意味を持つ美しい文様（もんよう）は母から娘に伝えられます

（萱野茂二風谷（にぶたに）アイヌ資料館提供）

（（公財）アイヌ民族文化財団提供）

美しい文様（もんよう）や飾りのついた衣服は儀式や祭りの晴れ着

アイヌの人たちがかつて身に着けていた衣服は、オヒョウの樹皮やイラクサなどの繊維を紡いだ糸で作られ、防寒などのために動物の毛皮や魚の皮なども使われました。また、本州や中国大陸から木綿や絹が手に入るようになると、これらの布も用いられるようになりました。

形は和服に似ており、前で合わせてひもなどで結び、丈はひざ頭より少し下くらいまででした。

衣服には晴れ着と普段着とがあり、今、資料館や写真などで目にする美しい文様（もんよう）のついた衣服の多くは、儀式や祭りのときに着た晴れ着です。普段着は労働をするときに着ることが多かったので、今ではあまり残っていません。

チェプケリ（鮭（さけ）皮の靴）

（新ひだか町教育委員会提供）

マタンプシ（鉢巻き）

ホシ（脚絆（きゃはん））

（（公財）アイヌ民族文化財団提供）

（（公財）アイヌ民族文化財団提供）

（（公財）アイヌ民族文化財団提供）

文様の美しさに惹かれ 今も製作が続く

アイヌの人たちの衣服の特徴は、木綿などの布片や刺繍などによりさまざまな文様が施されていることです。

この文様は、美しく飾るだけでなく、魔よけなどの意味を持つもので、母から娘へと独特の文様が受け継がれてきました。

近年、このような衣服の製作を志す若い人たちが増えつつあります。また、製作した着物を踊りや儀式のときなどに着る人たちも増えています。

二風谷アットゥシ（樹皮で織った反物）
（平成25年3月経済産業大臣が「伝統的工芸品」に指定）
（二風谷民芸組合提供）

タマサイ（玉飾り）
（（公財）アイヌ民族文化財団提供）

儀式や祭りのときに 身につけた装飾品

男性はブドウのつるや柳の木の「削りかけ」などで作った冠をかぶり、儀式用の刀を下げ、地域によっては脚絆をつけたり、陣羽織を着ることもありました。

女性は鉢巻きや耳飾りをし、玉飾りを首にかけます。晴れ着の上に刺繍をした前掛けをすることもありました。

エムシ（飾太刀）
（新ひだか町教育委員会提供）

食 たべる

自然の恵みを活かし様々に調理して食卓を飾ります

山の幸、海の幸に恵まれた豊かな食生活

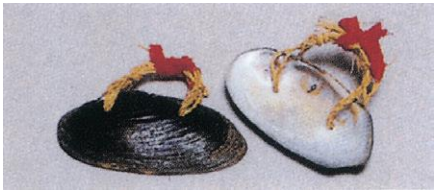
狩猟採集民族であったアイヌの人たちは、自然の恵みに感謝しながら、野山の動物や植物を食料としていました。

山ではシカ、ヒグマ、ウサギなどの獣や、鴨（かも）などの鳥をとりました。近くの川や海からは鮭（さけ）・鱒（ます）などの魚や貝が豊富にとれました。ときには、沖合に出てクジラ、トド、アザラシなどの海獣も捕らえていました。

山菜採りは女性や子どもたちの仕事です。アイヌの人たちは数百種類の食用植物を知っていたといわれます。それに若干の農耕もしており、自由な大自然の中で豊かな食生活をしていました。

ク（弓）・アイ（矢）（平取（びらとり）町立二風谷（にぶたに）アイヌ文化博物館提供）

タシロ（山刀）（新ひだか町教育委員会提供）



ピパ（穂摘み具）（新ひだか町教育委員会提供）

キテ（離頭銛（もり））（新ひだか町教育委員会提供）

マレㇰ（自在銛（もり））（新ひだか町教育委員会提供）

シッタㇷ゚（すき）（平取（びらとり）町立二風谷（にぶたに）アイヌ文化博物館提供）

サマッキニス（横臼（うす））・ポンイウタニ（小杵（きね））
（平取（びらとり）町立二風谷（にぶたに）アイヌ文化博物館提供）

代表的な料理法

一般的な料理法は、山菜などの野菜と肉類を煮て、塩と獣・魚油で味付けしたなべ物で、クマ肉、シカ肉、魚など、材料によっていくつかの種類がありました。

ヒエ、アワ、イナキビなどの穀類に山菜や保存してあるオオウバユリなどを入れたおかゆも作りました。また、獣肉や鮭などの串焼き、山菜のおひたしなども作りました。

これらの料理は、今では日常的なものではなく、儀式などのときに作られます。

チポロラタシケプ
鮭の卵（イクラ）を使った料理

メノコイタ（まないた）
（平取町立二風谷アイヌ文化博物館提供）

食物の保存法

食料の確保は自然の恵みに頼っていたため、様々な保存法が工夫されていました。

肉や魚は天日乾燥し、さらに家の中につるしておいたり、くん製も作りました。

植物は球根を食べるもの、葉や茎、果実を食べるものに分けて、ほとんどのものを乾燥させて保存しました。

また、冬に鮭などを凍らせて保存する「ルイペ（とけるたべもの）」は、今では高級料理となっています。

オントゥレプ
（オオウバユリの団子）

住（すむ）

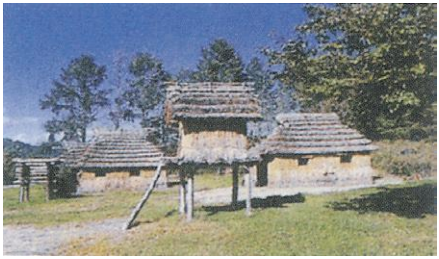
木やカヤで「チセ」を建て コタンをつくって 秩序ある暮らしをしていました

自然の材料だけで作り 神々と一緒に住む「チセ」

家にはそこに住む人たちの文化が集約されています。アイヌ語で家のことを「チセ」と呼びます。アイヌの人たちの伝統的な家は、すべて木やカヤなど自然の材料を用い、ブドウのつるなどで結わえて作りました。

内部は地方によって少し違いますが、物置も兼ねた玄関を入ると、中央に炉が切ってあり、その両側が居間と寝床で、家族や客の座る場所も決まっていました。

さらに、奥には宝物置き場や神々の出入りする窓がありました。



アイヌ文化保存のため、平取町二風谷に復元されている昔の家屋（萱野茂二風谷アイヌ資料館提供）

川沿いや河口に つくられた「コタン」

アイヌ語で集落のことを「コタン」といいます。

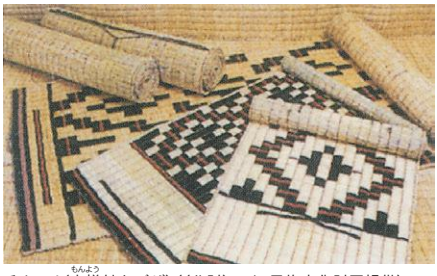
大きな川のそばや海に注ぐ河口近くの小高いところに数戸〜十数戸からなるコタンが点在していました。コタンの家々には、食料を保存する倉庫、子グマを飼う檻、祭壇などが付属してつくられ、共同の施設として水汲み場、舟着き場などがありました。

それぞれのコタンでは、シカやクマ、ウサギなどの狩りをする山、鮭や小魚などをとる川、着物や敷物、家屋の材料を採取するところなどが、おおよそ決まっていました。

そうした秩序正しい社会生活は、コタンの「村長」を中心にして守られていました。

プ（倉庫）（萱野茂二風谷アイヌ資料館提供）

ヘペレセッ（熊の檻）（萱野茂二風谷アイヌ資料館提供）



チタラペ（文様付きゴザ）（（公財）アイヌ民族文化財団提供）

祈 いのる

神々の護(まも)りに感謝し平和な暮らしを願う「カムイノミ」

（新ひだか町教育委員会提供）

人間に必要なもの 能力以上のものが「神」

アイヌの人たちは、天然現象や動植物、人間の作る道具などすべてに「魂(たましい)」があり、神の国から使命を担って姿かたちを変えて地上に降りてきていると考えました。その魂(たましい)は人間にとって有益なものだけでなく、天災や病気などにもあり、このうち、人間の生活に必要なもの、人間の力の及ばない事象を「神」として敬いました。

神々の護(まも)りと生活の糧(かて)の提供があって初めて、人々の安定した平和な生活があります。そのような生活が続くことを祈願し、これまでの神々の護(まも)りに感謝を捧(ささ)げるのが「カムイノミ（神への祈り）」の儀式です。

イナウ（木幣）
（新ひだか町教育委員会提供）

イクパスイ（奉酒箸(ばし)）とトゥキ（杯）
（新ひだか町教育委員会提供）

イオマンテリムセ（熊（くま）の霊送りの踊り）　（（公財）アイヌ民族文化財団提供）

神々への感謝と願いをあらわす舞踊

神々への祈りには、歌や踊りも重要な意味を持っています。「イオマンテ（熊（くま）の霊送りの儀式）」の後には、「リムセ」、「ホリッパ」などと呼ばれる輪踊りをします。

また、男性によって悪い神を追い払う「剣の舞」や「弓の舞」、女性たちが優雅に舞う「鶴（つる）の舞」、「水鳥の舞」など、たくさんの舞踊が今も伝承されています。このようなアイヌの人たちの伝統的な踊りは、国の「重要無形民俗文化財」に指定され、さらに「ユネスコ無形文化遺産」にも登録されています。

アイヌの人たちが伝承する歌の数々

儀式のときなどに座って歌う「ウポポ」、即興的に気持ちを歌うとされる「ヤイサマ」、お酒を造ったり穀物を粉にしたりするときに歌うとされる歌、子守歌や遊び歌など、さまざまな歌が伝承されています。

史 あゆみ

和人によって平和な暮らしを破られ差別と貧しさに苦しみました

商人の横暴と搾取に泣いた松前藩時代

15世紀以降、蝦夷地に和人の移住が増えてくると、アイヌの人たちの平和な暮らしは破られていきました。記録に残る最初の衝突であるコシャマインの戦いはそのころに起こっています。

米のとれなかった松前藩では、藩財政を維持するため、蝦夷地をいくつかに分割し、主だった家臣に知行としてアイヌとの交易を認めました。これを「場所」といい、さらにそれを商人の手に委ねました。これが「場所請負制」です。18世紀以降、アイヌの人たちはこの枠に厳しくしばられ、商人の横暴と搾取による苦しい生活を余儀なくされました。

場所請負制の弊害が目立ったこと、さらにロシアなどの外国船が蝦夷地の周辺に現れるようになったことから、幕府は蝦夷地を直轄領とし、直接交易や、風俗の和風化などを進めました。

しかし、幕府の財政などの問題から長くは続かず松前藩に戻したり、幕末には再び直轄とするなど蝦夷地とアイヌの人たちに対する政策は目まぐるしく変わりました。

大量の移民で生活苦進む明治以降

明治２年、政府は「開拓使」を設置するとともに蝦夷地を「北海道」と改め、本州などからの移住による北海道開拓を進めました。土地の私有制度が定められ、払い下げを積極的に行い、資力のある会社や個人には広大な面積の土地を貸し、開墾すれば無償で付与するという特典も与えました。このため、明治初期に12万人程度に過ぎなかった人口は、30年あまりの間に100万人を超えました。

この間、アイヌの人たちにとっては、過酷な場所請負制度は廃止されたものの、食料などの物資の供給を請負人に頼っていたため路頭に迷い、さらに主食としてきた鮭やシカは和人の乱獲などで資源が減り捕獲が禁じられました。

戸籍の上では「平民」とされ、日本国の一員とされましたが、アイヌの人たち独自の文化が制限あるいは禁止され、社会生活を営む中で日本語の使用を余儀なくされるなど、アイヌの人たちにとっては、社会全体からの同化の圧力が強く感じられる環境になりました。

また、幕末以来、和人によって疱瘡（天然痘）や結核などの病気が持ち込まれ、多くの人たちが亡くなりました。

このような移住民の急増や土地政策、狩猟の禁止などによって、少数者となったアイヌの人たちの生活領域はより一層狭められ、苦しい生活を強いられました。

さらに同化策によって多くの民族文化が失われていきました。

和人の圧迫に抵抗した戦いの歴史

和人の蝦夷地への渡来が増えるにつれ、アイヌの人たちの生活が圧迫され、交易上の摩擦なども重なって、両者の間にいくつかの争いが起きました。

コシャマインの戦い

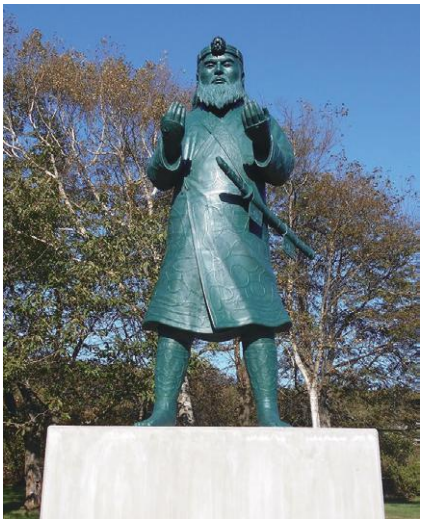
注文された小刀のでき映えをめぐって、和人のかじ屋が、アイヌの若者を殺したことをきっかけに、1457年、コシャマインはアイヌの人たちを率いて和人の武将たちの居館を襲いました。そのほとんどを落としましたが、松前藩の始祖とされる武田信広の策略によってコシャマインが討たれ、アイヌの人たちは敗北しました。

シャクシャインの戦い

沙流地方と静内地方のアイヌ漁狩猟権をめぐる争いに端を発し、松前藩との争いとなり、1669年、静内のシャクシャインが東・西蝦夷地のアイヌの人たちとともに一斉蜂起しました。戦いは互角のため和睦することになりましたが、その酒宴の場でシャクシャインは謀殺され、アイヌの人たちは敗れました。

クナシリ・メナシの戦い

シャクシャインの戦いの後、和人のアイヌ支配は一段と強化され、1789年、場所請負人らの横暴に耐えかねて、クナシリ（北方領土の国後島）・メナシ（北海道東部）地方のアイヌの人たちが立ち上がったものの、松前藩に制圧されました。主だった37名のアイヌの人たちが処刑され、これによってアイヌ側の和人に対する組織だった武力による抵抗は最後となりました。



シャクシャイン像（新ひだか町、（特非）新ひだかアイヌ協会提供）